

郷土博 通信

創刊号

CONTENTS

- 発刊にあたって 1
- 展示室紹介 2~4
- 昭和40年会「We were boys!」展 5
- 狭岑（さみ）ノ島で詠まれた
柿本人麻呂の挽歌 6
- 定点観想① 小学7年生 7
- 赤い蘇鉄の実がなりました! 8
- 「海竜を見た日」 8
- おしらせ 8

発刊にあたって

館長 加藤 優

郷土博物館の母体である財団法人鎌田共済会は、実業家・貴族院議員であった鎌田勝太郎によって今から100年ほど前の大正7年（1918）に、慈善・育英・各種社会教育を目的として設立されました。その事業施設として図書館、郷土博物館、社会教育館などが開設され、それらを拠点として種々の活動を展開してきました。

郷土博物館は今から88年前の大正14年（1925）に開館し、展示・調査・研究・資料収集活動を盛んに行っていました。

情報発信の面でも種々の出版活動を通じて旺盛で、定期刊行物では共済会機関誌『鎌田共済会雑誌』やその後継誌『郷土文化』、毎年の博物館展示を記録した『郷土博物館陳列品解説』などがあり、単行本も歴史、伝記、資料目録、史跡案内など多数ありました。

郷土博物館は戦争末期の昭和19年（1944）に閉鎖になり、戦後しばらくは再開もままならず苦難の内にありました。昭和28年頃から博物館としての活動を徐々に開始しますが、鎌田共済会自体の活動縮小もあり、あまり活発とはいえませんでした。

その間、平成4年（1992）には博物館の南側を走るJR予讃線高架化事業に伴い、当初の郷土博物館建物は取り壊されるようなことも起こります。現在、旧図書館建物を改装して博物館としての活動を継続しているところです。なお当館は鎌田共済会の草創期からの活動が続く施設としては唯一のものでもあります。

平成23年に鎌田共済会が公益財団法人となったのを契機に、博物館の活性化と充実を図ることになり、展示活動の刷新や、収蔵資料の抜本的な整理、調査を行っており、近々公開講座も開催します。

活性化の一環として、今回『郷土博通信』の発刊することになりました。お知らせやトピック、展示紹介、調査・研究状況、小論考、所縁の方々の寄稿等からなる全8頁、年2回刊行というささやかなものですが、今後内容の充実を図っていく所存です。

今後とも鎌田共済会郷土博物館へのお力添えをよろしくお願いいたします。

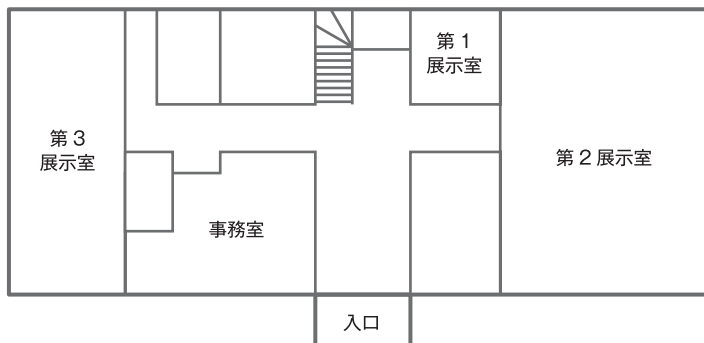


展示室紹介

第1 展示室

この部屋は3展示室の中で最小の展示室です。ここでは、鎌田勝太郎と十数名の有志が明治19年(1886)坂出塩釜神社境内旧塩会所に創設し、7年間で閉館した私立^{せいせいがかん}済々学館についてご紹介します。また、鎌田勝太郎が社会貢献をするための母体として設立した財団法人鎌田共済会が、文化的活動の拠点として建設した郷土博物館の活動記録も展示しています。

展示室位置図



済々学館課程一覧表

済々学館扁額

済々学館は愛媛県第二中学校と改称されていた高松中学校が廃止されたことを受け設立された、当時の愛媛県讃岐国に一つしかない中学校でした。新しい時代の流れに沿った教育が行えるよう、若く優秀な教長や教員を集めていました。教育内容は「済々学館課程一覧表」によりますと、英語を中心に国語漢文、数学、歴史、地理、物理の他、簿記の授業もあるなど時代の求めに応じた人材を5年間で育てることを目指していました。

明治26年(1893)4月、尋常中学校が高松に新設されたことでその役目を果たしたとして、同年閉館しました。

郷土博物館は大正14年(1925)5月、皇太子(後の昭和天皇)成婚を記念して、図書館の南側に建設されました。博物館活動に大きな役割を果たしたのは共済会調査部主事岡田^{おか}唯吉^{ただきち}でした。岡田は調査、資料収集、研究活動を精力的に行い、その成果を博物館で展示します。大正15年を第一回として昭和18年(1943)まで19回の展覧会を開催し、毎回多くの入館者を集めました。また、展示資料の写真や解説は『郷土博物館陳列品解説』として刊行されました。その活動は今日の博物館の事業に比してもそんな色のないものと思われます。

(廣瀬 永津子)

創建時の博物館



第2 展示室

この部屋は、久米栄左衛門通賢（1780～1841）の事績を今日に伝えることを目的としています。

久米通賢は、19世紀初期、天文・暦学、銃砲開発、土木、経済などさまざまな分野で活躍した人物です。彼が遺した記録や器物等は、特に当館の中核となる資料群です。

久米通賢は、大内郡馬宿村（現在の東かがわ市）に生まれました。幼い頃から器用だったと伝えられ、19歳の時大坂の間重富（1756～1816）に入門し、天文学や測量学を学んだ後、讃岐に戻り、本格的な活動を開始します。



久米栄左衛門肖像

文化3年（1806）には、高松藩の命で、自ら製作した測量機器を使って、測量や天体観測を行い、同5年には、伊能忠敬の讃岐測量に同行し、案内役も務めました。



象限儀



天球儀

通賢が生きた19世紀の初め頃は、幕府、諸藩ともに海防や財政難への対応を迫られた時代でした。通賢は銃砲の発明改良を行い、文政7年（1824）には藩財政の再建策として、坂出塩田の開発と、砂糖の流通を統制することを提案した建白書を高松藩に提出しました。まず、塩田の開発が採用され、通賢はその責任者として、大変な苦勞の末に完成させます。その後、砂糖の流通統制も導入され、高松藩の財政再建に大きく寄与することになりました。（吉久 由紀子）

〔「久米栄左衛門通賢」の読み方を明確に知る資料は今のところありません。現在一般的になっている呼称に従っています。〕



阿野郡北坂出浦沖林田村綾川之裾ヨリ御供処村迄御新開之地割分間絵図
（文政12年頃の坂出塩田の状態を描いた絵図。）

第3 展示室



岡田唯吉愛用のカメラ

開館以来、常設展示のほかに、昭和18年(1943)に至るまで、毎年1回、県内の貴重な資料や名宝を展示する特別展を開催しました。そして、その際に借用した資料は、写真での記録や、忠実な模写、あるいは謄写(書き写し)の作業を行なっています。

この作業により、現在は所在不明となった原資料の内容等が分かるというケースもあり、今では貴重な資料群となっています。

大正14年(1922)5月24日に開館した郷土博物館は、調査部主事であった岡田唯吉(1872～1945)が博物館主事も兼務し、その八面六臂の活動によって盛んに展示・資料収集活動を行います。



讃岐国往還絵図 部分



讃岐国往還絵図〔明治政府による、通信制度の体系化に伴って、明治5年に製作されたもの。〕
(模写)〔往還沿線に、「郵便」や「相対人馬継立所」等の位置や記号がある。〕

現在、当館では、郷土に関する歴史資料をはじめ、民俗、考古資料、工芸品、書跡、鉱物、化石等の多様な分野にわたる約6万点の資料を収蔵しています。

今後、第3展示室では、当館が所蔵するさまざまな資料をご紹介します。これらの資料を通して郷土の歴史を知り、興味を持ち、理解を深めるきっかけとなれば幸いです。

(吉久 由紀子)

特別展

昭和40年会 「We were boys!」展

7月1日から9月1日まで ～ 当館2階と3階 (ペントハウス)

「昭和40年会」は現代日本の美術界で大いに注目されている作家集団で、昭和40年に生まれた東京芸大美術学部の同期生、会田誠・有馬純寿・大岩オスカル・小沢剛・パルコキノシタ・松蔭浩之の6人で構成されている(結成は1994年)。会長の松蔭氏によれば「俺たちは昭和40年に生まれた。ただそれだけだ」そうだが、最近の六本木、森美術館での会田誠展を始め、1人1人がそれぞれ目覚ましい活動を展開している。

3年前の「瀬戸内芸術祭」(以下瀬戸芸)ではグループの一人、大岩オスカル氏が男木島公民館の壁一杯に「大岩島」というマジックペン書き下しの大作を出展したが、惜しくも失火で焼失してしまった。今年の「瀬戸芸」ではグループ全員が同じ男木島で休校中の男木小・中学校の校舎を使って「男木学校」というインスタレーションを展開するという。

その彼等は、2011年5月～7月にドイツのデュッセルドルフで「We are boys!」というグループ展を開催し、好評を得てウクライナのキエフにも巡回した。これをドイツに見に行きたかった!

デュッセルドルフでの
「昭和40年会：
We are boys!」展の
プログラム



鎌田共済会のグループ会社「鎌田醤油」では幸い、2007年に「40年会」の一人、小沢剛氏にお願いして「讃岐醤油画資料館」という空想美術館を創っていた。だいている。

「瀬戸内芸術祭」に
呼応して、当館でも
昭和40年会
「We were boys!」展
を開催します。



瀬戸芸についての
40年会の記者会見。
六本木、森美術館で。
〔四国新聞〕
〔2013年2月11日〕

小沢剛
讃岐醤油画資料館



そのご縁もあって、鎌田共済会郷土博物館で今回の展示「We were boys!」が開催されることになった。

これはスゴイことです。あの昭和40年会6氏の作品が夏会期の男木島に合わせて坂出の当館で一室に会い、観覧できる! 会場の設営等に費用がかかりますので有料にはいたしますが、何卒大勢の皆様のご来館をいただきたいと思います。

期間 2013年7月1日～9月1日
場所 郷土博物館 2階と3階 (ペントハウス)
料金 500円
(小学生及びバスポート提示の場合は300円)

(常務理事 鎌田 郁雄)

さ み 狭岑ノ島で詠まれた柿本人麻呂の挽歌

松本豊胤

萬葉集卷第二の挽歌二二〇番に柿本人麻呂の「讃岐の狭岑ノ島で、磯端に死人を見て、柿本人麻呂の作った歌。並びに短歌。二首

たまもよし讃岐の国は、国からか見れども飽かぬ。神からか甚尊き、天地日月と共に、足りゆかむ神のみ面と、つぎて来る那珂の港に舟浮けて、わが漕ぎくれば、時つ風雲居に吹くに、沖見ればしき波立ち、岸見れば白波騒ぐ。いさなとり海を畏み、行く舟の楫引き折て、遠近の島は多けど、なぐはし狭岑の島の荒磯回に庵りてみれば、浪の音の繁き濱邊を、しきたへの枕に寝して、荒床にころ伏す君が、家知らば行きても告げむ、妻知らば来ても問はまし。たまばこの道だにしらず、おぼほしく待ちか恋ふらむ。はしき妻らは

反 歌

妻もあらばとりてたけまし。狭岑の山野の邊の稗菜すぎにけらずや

沖つ浪来寄る荒磯を、しきたへの枕と枕きて、寝せる君かも
(折口信夫・口訳萬葉集)

柿本人麻呂論を始めとして、彼の挽歌に対する論考は枚挙にいとまない。中でも衝撃的なものは、梅原猛の人麻呂流人説である。

「…不安の中に人麿は沙弥島に上陸し、荒磯に庵を作る。おそらく庵を作るのは流罪者の仕事であろう。かれは何の保証もなく島に放たれたのである。…流人人麿は、ここに先輩流人の無残な屍をみたのである。そこにおそらく、近い将来自分が陥るにちがいない運命を見たのである。」(水底の歌・新潮文庫)

本論で梅原説を紹介するには紙面が足りないが、次に最近発表された雲丹亀五郎氏の人麻呂論に憑拠しながら筆者が平素考えてきた狭岑ノ島挽歌論を述べさせていたきたい。

本題に入る前に柿本人麻呂の人物像について考えをまとめておきたい。

記紀や「新撰姓氏録」によると、柿本朝臣の家は、豪族和珥氏の分派で、春日、小野、栗田氏等と同祖であるが、柿本氏は小野氏と共に小野神の祭りに巡遊し言語呪術を司どっていた。

雲丹亀氏は、「倭名抄の説文に柿は赤実果也と記して、加岐と訓じたところから類推すると、此の赤色に太陽の威力を想像して赫実木(かむぎ)は即ち、威力ある実の留まる木、或は、神木(かみぎ)とも解され、太陽神の依ります神聖な呪木とも想像できる。」(柿本人麿家門の発生と古信の

反映「新国学の諸相」国学院大学院友学術振興会編)

また高崎正秀氏は、「柿本家は、大倭宮廷の北辺の垣本にいて、御魂触りと、ひな、ひらの世界から寄り来る目にみえぬもの、すだま、おにの類を鎮圧する呪言・呪術の家柄であつたとし、人麻呂が殊の外、挽歌の歌人として、萬葉集に数々の歌を残したのは、幽界と顕界、死と生の境目の行事と呪言とに因み深き、柿本家の伝統として、まさに当然過ぎる当然であつたし、天皇や皇族といった身分の高い人に付き従って、代わって歌を創る、扈從の歌人、挽歌の歌人でもあつたとしている。(折口信夫全集巻九・古典の新研究)

さて、ここでそろそろ狭岑ノ島で詠んだ人麻呂の挽歌に取り付けてみたい。

冒頭人麻呂は、「玉藻もよし、讃岐の国は、国からか見れども飽かぬ。」と、国讃の歌が語られる。古代国讃は、国魂を讃めそやして、これに稲をよく稔らせようとする呪術のための歌に発しているとされている。

人麻呂は大歌所に仕える宮廷歌人として、天神たる天皇の意を体し、巡遊俗人として讃岐の土地を踏みしめ、地霊に対して神勅を宣り下す役割を果たしたのではないか。

「続日本紀」を開いてみると、次のような記述がみられる。

文武天皇元年(697)…阿波、讃岐、伊予等国飢、
賑給之、又勿収負税、(飢饉)
大宝元年(701) ……紀伊、讃岐、伊予、十七国蝗、
大風壞百姓廬舍損秋稼
(いなごの害と大風で滅収)
大宝四年(705) ……讃岐国飢賑恤之(飢饉)
慶雲三年(706) ……紀伊、讃岐、伊予七国飢、
竝賑恤之(飢饉)
和銅元年(708) ……讃岐国疫、給藥療之(疫病)

以上のようにざっと見渡しただけでも、文武天皇元年から、和銅元年までの十二年間に五回の飢饉や疫病に襲われている。かように疲弊した讃岐に人麻呂があえて姿を見せたのは、先に触れたように呪言者として、扈從の歌人としての血の宿命であつたともいえる。

そしてまた、荒磯に横たわる死者に対しても、海神による魂の浄化と荒磯の岩に充滿する呪的生命の根源力に魂をあずけて、転生復活を期待している。

人麻呂にとっては、挽歌と風土讃歌は同じ位置にあったのである。
(外部諮問委員)

定点観想 ① 小学7年生

榮 岩男

昭和8年に金山尋常小学校へ入学した私は、虚弱を理由に6年生を落第。まるまる1年、父親の養育指導を受けることとなった。朝は5時起き、農作業と^{かます}刈織り、農閑期は村有林の松の伐採など山子の仕事。すべてを学ぶ体験となった父との仕事は、嬉しく楽しいものであった。

さらに、その間、書店の新本の配達。宛先に岡田唯吉氏の名前もあったが、何の本であったかは覚えていない。

さらにその間、鎌田博物館へ発掘の展示物を見にいつ

たり、図書館で読みこなせる本を借り出して、手あたり次第に読んだ。「ああ無情」という本に涙が出るほど感動を覚えたが、後に「レ・ミゼラブル」の訳本であることを知った。

家は小農家であり、何の書物の一冊もない。ましてや新聞もラジオもない家であるだけに、誠にありがたい鎌田の施設であった。

この1年間で、私の体を鍛えなおしたのか、以後60年余りの年月、無欠席、無欠勤で通すことを可能としてくれた。



讃岐
國府遺蹟考
鎌田共済會叢書 第四輯
岡田唯吉 著
鎌田共済會調査部

讃岐国庁跡碑



なおまた、家のそばにある笠山の恩恵も極めて大きい。

ところで今年は、鎌田図書館を始めとする共済会施設を設立して96周年となる。創立者鎌田勝太郎氏が、地域づくり国づくりの根幹に、人づくりを極めて重く考え、学校教育は勿論、広く社会教育をとりあげ、そのことに関する施設、運用に力をそそがれた。

その一つ、府中町の国庁確定に大正14年にすでに上掲の地図等を作成されており、今回「廳」附近のトレンチによる確定は、鎌田・岡田氏などともに、地下で快哉を叫んでおられることであろうと喜びに堪えない。

(香川県教育会副会長・坂出市教育会会長)

INFORMATION

鎌田共済会郷土博物館公開講座

『慶長八年古活字版太平記』
のはなし

全国的にも希少な古活字版の一つである当館所蔵の慶長8年(1603)古活字版「太平記」とはどのようなものなのか、実物を御覧いただきながら、その詳細を解き明かします。

平成25年4月27日(土)13:30~15:00
(開場13時)

会場 鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師 加藤 優(館長)

電話・ファクスか
HPのフォームから
お申込み下さい。

参加
無料

締切
4/20

先着
40名

TEL:0877-46-2275 FAX:0877-45-0035
HP: <http://www.kamahaku.jp/>

「ミュージアム88
カードラリー in四国」

<http://www.museum88.com/>

このカードラリーは、四国の地方銀行4行が、四国の文化を応援する企画です。参加証を持って美術館、博物館に入館すると特典があります。当館もこの度、カードラリー参加施設に加わりました。



「カードラリー」オリジナルミュージアムカード

赤い蘇鉄の実がなりました!

博物館の正面玄関前に大きな蘇鉄の木があります。この蘇鉄を何気なく見上げたある冬の日。幹の先端にある鳥の巣のような中から赤い実がのぞいているのを発見。手を伸ばして探してみると大小の実がいっぱい隠れています。



それはまるで、巣の中で孵化を待つ怪鳥の卵!木のまわりを廻ってみると何か所に鳥の巣が!そして卵が!

ものの本によると、蘇鉄は南国の植物で雌株と雄株があり、雌株は初夏に幹の先端に球形の雌花を咲かせ、冬から春にかけて赤い実をつけ、一方、雄株は雄花をつけ、花粉を散らすだけで、実は結びません。

蘇鉄は幹や実にデンプンを多く含むので、沖縄では古く救荒植物として盛んに栽培されましたが、猛毒を含むため、除毒しないまま食べ死亡者が出たこともあるそうです。

ということで、玄関前の蘇鉄は雌株で、〈鳥の巣〉のように見えたのは雌花、そして〈卵〉は実(種子)であることが判明。

ちなみに蘇鉄という名は、枯れかかったときに鉄釘を打ち込むと蘇るということに由来しているとか。

この蘇鉄は、大正11年、図書館開設の際に植樹されたもので、樹齢は優に100年を超えます。これまで図書館や博物館、そこに出入りする人びとを見守り続け、今ではすっかり博物館のシンボルになっています。これからもこの場所でたくましく葉を広げ、ずっと立ち続けてくれることでしょう。(Y.Y)



映画撮影

海竜を見た日

今年2月香川県で開催された「さぬき映画祭2013」(ディレクター:本広克行)の優秀企画上映作品のひとつ、「海竜を見た日」(野村忠弘監督作品)の撮影が2012年8月7・8日の二日間、当館で行われました。

博物館は大正11年に図書館として建てられ、1998(平成10)年、国の登録有形文化財になりました。

映画は昭和29年を舞台に展開。郷土博物館は「県立中央図書館」として蘇り、まるで時間が逆戻りしたかのように図書館当時を思い出させるような撮影現場となりました。(S)



Access

開館時間 ▶ 午前9時30分~午後4時30分(入館は4時まで)

休館日 ▶ 月曜日/祝祭日

夏季特別(8月13日~15日)

年末年始(12月29日~1月4日)

入館料 ▶ 無料

高松から…快速マリンライナーで約15分

岡山から…快速マリンライナーで約40分

JR予讃線坂出駅から徒歩5分

■ 駐車場あり 15台

鎌田共済会郷土博物館